

《09年度研究会年報報告会》

今年の年報は今までと違うぞ

年報が発行されるようになってからもう20年近くが経とうとしている。今回の150ページにおよぶ年報に対して「今年の年報は今までと違う」とコメントしたのは編集を担った向井さんであった。さて、この年報の報告会が3月13日に庄司先生宅で行われたので、今回はこの報告会の模様をレポートしたい。



追悼 日高敏隆

日高敏隆と庄司和晃

植垣 一彦

京都大学の動物行動学者である日高敏隆氏が亡くなったのは昨年であった。実はこの著名な日高さんと庄司先生とは熱い接点があったというのが今回の植垣さんの報告である。今回の紹介文は「人は実物が見えるか」（「波」新潮社広報誌 2003,11号）である。日高さんが庄司さんとの出会いを語ったこの文章は「あまりにも強烈な印象だったので、今なお何か機会のあるごとに、何度でも人に話したり書いたりしたいことがある。もう30年も以上も前、まだ東京の農工大に教員として勤めていた時のことだ。…」で始まる文章は、結論を始めに述べることの多い柳田國男の文章を彷彿させる、と植垣さんは言う。

30年前のある日、庄司さんは成城高校の卒業生でもある日高さん（柳田國男の長

男の家庭教師）に授業で書かせたアリの絵を見せに行った。子どもたち一人一人の絵は上・中・下と三段になったものだ。始め子どもたちはアリの絵を描きなさいといって描いたものでイメージに頼った絵は正確なアリを描写していなかった。次は実物のアリを見ながら描いた絵であるが、「ここで本当のアリの姿が描かれているはずだ」と期待した日高さんの意に反してアリの体は二つに分かれ足は4本であった。庄司先生はそこでアリの体の見方を説明していく。子どもたちはその発見に驚き納得のいく絵を描いたのが三枚目の絵だった。

庄司先生の認識論の発露に触れるエピソードの紹介であった。「人間は実物を見たからといっておいそれと実物が見えるわけではない…」という日高さんの言葉がそのまま認識論の核心につながる。

ここでの植垣さんの注目点の一つは、庄司さんが自分の実践を新進の動物学者に持っていったことであった。現場の先生が受け止めきれなかった認識論の世界を日高さ

んがしっかりと受け止めてくれただけでなく、その後庄司さんは、矢島稔さんと「小学館昆虫生態図鑑」(1968)を執筆したというエピソードも庄司先生から紹介された。



無意識の認識の解明

「比較について」

尾崎 光弘

最近言葉についてせまることが多いという植垣さんのコメントがあったが、尾崎さんの「比較論」は、我々の足下にある認識についてあらためて考えさせる機会を与えてくれた。枠組みをはっきりとさせたいという点にこだわる尾崎さんらしいせまり方だということはみんなに伝わっている。

医療に関心のある今井さんは、治療と医療は違うという独自の視点から比較は本質を掴んでいるかどうかを鍵だと述べた。そして自らの看病の経験から比較認識は「認識」だけでなく「心」も必要だと指摘している。比較を試みる人間の情念のようなものの動きにも着目しての考えであろうと思う。尾崎さんによると比較の要点は次の3つだ。

- ①比較とは、比較したいモノをとの間に違いとその基準を発見すること。
- ②発見される基準の出自は比較したいモノの属性に根拠を持つこと。
- ③比較は実践的認識であり、実践に帰着する展開（特に選択行為）と認識の深化へ向かう展開の二方面が考えられること。

言葉にこだわることによって子どもたちを納得させたり「へー」と驚かせたりすることができるという尾崎さんに庄司先生は、びっくり段階のレベルがあるという。

これは認識の深さを表す言葉だろう。尾崎さんも比較という認識の深さのレベルを意識した瞬間であった。

*なお、庄司先生の認識論については、この年報の若井貴裕さんの修士論文「庄司和晃の理科教育論に関する一考察」（京都大学）に詳しくまとめられているのでご希望の方は、事務局まで連絡下さい。

目次

「自分探しの歴史教育 徳永忠雄・・・1

2009年をふりかえって 長谷川孝・・・11

学ぶ権利は生存権 学びと共鳴し、エンパワーする教育を
政治主導にお任せしない主権者教育に 「政治主導」は困る・・・
教育は「政治主導」でなく市民自治主導で！
「自分は大切」と自己肯定できる子を育てよう
相模原市教育委員会への手紙 授業を「取材」という姿勢で受講を！

世渡り論 今澤正史・・・25

人間はいかにしてつくられるか？ 人の見方
明るい性格になるにはどうしたら良いか？ 元氣回復プラン、プラス共感
ストレス解消法 「何故？と問え、予想はあるか、確かめよ」
「リラクセス」と「リフレッシュ」 労働の意義 物にもほめたい
労働を楽しくするには 「恐れを忘れた心に、魔、忍び寄る」 「苦は楽の種」

庄司和晃の理科教育論に関する一考察—科学観の形成という主張に着目して—

若井貴裕・・・43

比較について 尾崎光弘・・・69

ことば遊びコレクション'09 向井吉人・・・79

小学5年生は、神仏をどうとらえているか

篠原賢朗・・・89

(年報横書き原稿目次)

リテラリズムのパワー

言葉遊びコレクション'09

向井 吉人

「言葉遊び」は単なる遊びではなく正真正銘の言葉とのバトルである。言葉を単なる伝達手段としてとらえるのではなく、表現の手段として言葉を主体化させるという手段がこのコレクションにほとぼしり出ている。

今回の話題の中心は、『ことことわざおのことわざ劇場』（太田垣晴子 メディアファクトリー）である。リテラリズム（直解主義）にこだわったというこの本の作風は、ことわざの裏の意味を読み当てるのではなく表の言葉のギャグ化あるいはパロディ化である。

「漁夫の利」→「漁夫海苔」や「辛酸をなめる」→「進さんをなめる」など世の中に流布しているコトワザならではの茶化しが効いている。これらは「週刊朝日」に毎週連載している「弘兼憲史のパパは牛乳屋」のもじりとよく似ている。「パパは牛乳屋」→「パパアニューニギア」、「海老蔵の結婚祝い」→「エピソードけっこう卑猥」など秀逸なギャグが毎週並ぶ。

永野さんが、女の子よりも男の子の方がこのての遊びはうまいのでは、という問いかけに向井さんは「ギャグは人格に関連しているかもしれない」とのこと。品行方正な女性には諧謔はふざけと映るケースが多いのかもしれない。

植垣さんも言っていたがとにかくTVから雑誌、書籍にいたるまで向井さんの「言葉遊びコレクション」は、驚きのチェックである。フジTVの「ペケポン」テレビ朝日の「ガリレオ能研」での謎かけからはじまり、「こどものとも」の付録の中の言葉遊びにいたるまでその収集は舌を巻くほどである。とにかくその徹底した言葉遊びへのこだわりと20年にも及ぶこのコレクションは、我々に世相を息づかいを伝えてくれるといってもいいだろう。

ほとぼしる童心の感性

「りんちゃん えんやこら どこへやら」

登 麻美

庄司先生が何よりもこの作品を先に読んだという物語で、これは登さんの新境地である。読みながら映像が浮かんでくるようなお話だが、教室の子どもたちに聞かせた時もあえて絵をのせないでイメージをふくらませようと試みている。

物語は風船のりんちゃんの空での浮遊の旅をイメージをふくらませて描いている。自らの4歳か5歳の子どもの頃の体験エピソードで、お母さんがそれを風船の国がある、とそっと教えてくれたことで登さんのイメージは今に至るまで温め続けられたに違いない。簡単に童話とっていいのかわからないが童話のように無駄な言葉を廃しとてもシンプルで浮遊感のある文章だ。

登さん自身が三段階連関理論でこの物語をなぞらせ、赤でもない白でもないあえて中間の段階でいたいと位置を規定しているのも興味深い。

先ほども紹介したが受け持っているクラスの3年生の子どもたちにこれを読み聞かせたところ、返ってきたのは「絵はないの」という言葉であったという。正解を求めがちな今の子どもたちらしいアプローチで、物語のフリーハンド的な自由さになじまない様子が学力が高いという教室の雰囲気から伝わってきた。彼等にとっては正解のない読書感想文は苦手なのだという。登さん曰く、「言葉だけでイメージを作っていくという作業はレベルが高い。」

言葉遊びにも通じるのだが言葉やお話を自分と対峙させ相対化するという作業が正解を求めすぎる子どもたちに欠けているのではないかという思いがよぎった。

歴史を法則でとられられるか

「自分探し」の歴史教育 徳永 忠雄

今回この私の原稿について「仮説実験授業」の板倉聖宣氏の歴史の授業を意識したコメントを述べたため、板倉さんの歴史教育や仮説の認識論など幅広い意見交換が交わされた。

冒頭の「自分探し」とは私自身のことではなく、子どもたちの「自分探し」であるということをお断りしておきたい。あくまでも「歴史とは何か」という庄司先生のいう「とは教育法」に則った展開を目指したもののなのである。

板倉聖宣氏は仮説実験授業の思考法を通して歴史教育にもユニークな展開をしている。小田さんの紹介にもあったが、「生類憐れみの令」や人口論を語った「日本歴史入門」「お金と社会」などその切り口は、歴史を科学ととらえて小気味よい。ただ今回論じられたように「歴史とは何か」という問に対して私自身あまりにも統計主義的かつ科学的すぎるのではないかという思いを持って授業ではあえて使用しなかった。

歴史には一定の法則があるか、と問われると否である。庄司認識論的にいうと一定の法則性を歴史という社会科学の中に当てはめても良さそうだが、そういう板倉さんの史観はややもすると啓蒙主義的に成りやすく歴史の見方を押しつけることになるのではないかというのが植垣さんのコメントであった。

庄司先生はここで、子どもたちに「歴史とは何か」を問いかけることが大切だと言われた。「歴史」を短い言葉で表す時一人一人の本音が生み出されるというのだ。もちろん歴史認識はばらばらでもいいという前提の上で。この「歴史とは何か」を問う

ことがあのアリの実践につながる思考法だと私は受け止めた。アリの形象はある意味で一定だが、歴史認識は様々な人間の生活実験を経て多様な見方が生まれるということにあらためて気づかされた。それこそが私のねらう「自分探し」の方向であると革新した次第である。

「人口と移住」の源泉

柳田国男の「川と生活」 小田 富英

今回紹介されたのは『常民大学研究紀要』(2009.10)に発表された柳田國男研究の論文である。

小田さんは、柳田國男の生涯において重要な位置を占めるだろうと思われる「川」について兵庫県福崎の市川と板東太郎とよばれる利根川を取り上げて論究している。

市川にはガタロと呼ばれる河童が住む。夏に必ず誰かがガタロのいたずらの対象となり川に引き込まれるという話を引き「共同体の心性」の現れとしてとらえていると指摘する。さらに当時の利根川が水運の幹線として存在してきたことから貴重な「川と人との交渉史」があると柳田作品から発掘している。

小田さんは、「柳田民俗学は何か」と問われれば「人口と移住」だろうと断言する。そこには川を生業として住む人々や川を経て移動する人々をも含み、『都市と農村』を結ぶ重要な交通路であったことを読み取っている。

これらの柳田の視点を経て「川の総合学習」という教育現場への構想が紹介されて興味深い。柳田國男は自らの体験を通して「川」から「想像力」を得ていたのである。それはまた柳田民俗学という枯れることのない太い源流であった。

庄司認識論の一つの適用

癌治療に関わる者へのライフスタイルと病氣治しの本質を問う

今井 誠

この原稿については、尾崎さんの「比較論」の中でも今井さんが言及している。全面研のリニューアルスタートに弘前から駆けつけた今井さんは今回も鬼気迫る論文を書いている。

今井さんの遭遇した医師は認識において相対化できていないようだ。そこから三段階連関理論が俯瞰的でありまた相対的な視点を含むことが読み取れる。今井さんは鶴見隆史『真実のガン治しの秘策』の中に紹介される「ガンにかかる人には共通点がある」からヒントを得る。それは簡単にいえばライフスタイルの再考である。

今井さんは一元的な見方しかできない眼前の医者に対して「空中戦的自己運動」という認識論の援用による戦いを試みているのだが、癌を単に切開手術や病理学という狭義のモノとしてとらえることなく、生活者としてどう日常的にとらえるかということに関して示唆に富む論考になっていると思われる。

*付記 小田、尾崎、今井、徳永はこの会の(3/13)あと新宿で飲んだくれこの論考も含め侃々諤々と論じたのだが、酔酩のゆえ今回の記録には掲載できず。

植垣さんの「庄司和晃論 ～子どもの詩にふれて思うこと(その一)をめぐって～」と庄司先生の「認識論講義」は重要な論考であったが時間の関係で紹介ができず残念であった。ぜひ年報をごらんになって精読していただきたい。

また長谷川さんの「2009年を振り返

って」、今沢さんの「世渡り論」、篠原さんの「小学5年生は、神仏をどう捉えているか」は共に興味深い論考であるがここでは紹介のみにさせていただきたい。

植垣さんが最後の方で、全面研の「新たなスタートを感じる」ということを述べてくれたが、新たな視点で認識論を展開できればと考えている次第である。

(年報縦書き原稿目次)

目次

庄司和晃論～「子どもの詩にふれて思うこと(その1)をめぐって～

植垣一彦・・・1

認識論の講義記録

庄司和晃・・・9

認識論 {1}

- (1)初めての三段階論文づくり
- (2)なんで竜かアリンコか
- (3)見ないでかけたアリンコ
- (4)なぜ全員のアリンコか
- (5)まことに個性味を持つアリンコたち
- (6)三段階探し&三段階論文づくり

認識論 {2}

- (1)宗教的認識に目を注ぐ
- (2)偉大さづくりの成果
- (3)龍(竜)の九似
- (4)竜とは何か
- (5)まったく味のある竜の大群です

癌治療に関わる者のライフスタイルと病氣治しの本質を問う(2)

今井 誠・・・19

柳田国男の「川と生活」～柳田の想像力と総合学習、後藤民俗思想史をつなぐ～

小田富英・・・51

りんちゃん えんやこら どこへやら

のぼりまみ・・・71

◆参加者

秋本園子さん(藤沢市立看護学校)

吉新典子さん(埼玉医大看護学校)

庄司和晃、小田富英、今井 誠、植垣一彦、

永野恒雄、向井吉人、尾崎光弘、登 麻美、

道岡義経、徳永忠雄

劣等感ふき飛ばしのプロセス

研究には論文がつきものといってよいであろう。

ところが論文というと何となくいかめしい感じがするものだ。

雑誌の巻頭論文とか学位論文、卒業論文とかが思い浮かび、枚数も多く漢字ずらのすごさもあり“おそれ”が先にたつものだ。

しかし、一步下がってみれば、論は論であり、1枚でも2枚でも、その内容が何かを論じているのなら、それは立派な論文というべきであろう。こんなことは今更いうまでもないことかも知れぬ。だが、自分のことを振り返ってみると、自分にそういうおそれがあって、それを克服したところからいうと一理なきにしもあらず、というところであろうか。

字義を広辞苑にたずねてみると、

〔論〕①物事の道理を述べること。

②いいあらそうこと。あげつらうこと。

③意見、見解。

④文体の一。事理の正否を論議断定するもの。

〔論文〕①論議する文。理義を論じ極める文。論策を記した文。

②研究の業績や結果を発表した文。

とある。つまりは、事理の正否についてうんぬんした文章はすべて論文といってさしつかえないわけである。「おれはこの事柄、問題、提案について反対だ、賛成だ、ここは疑問だがここは賛成だ、なぜならかくかくのしだいだからだ、自分の体験からしてもそういえるし、りくつの上からでもまさにその通りだ、自分の予想、仮説ではこうだし事にあたってみてじっしょうしたところからいってもこうだといえる。だからこの問題についてはかく考えるのがいい、よさそうだ」…こういったものものであるならば、短ろうと長かろうと、それは一個の論文といっていっこうにかまわないわけだ。

私は『論文の書き方』『文章作法』といった類のものは数多く手にして大いに読んだ。そこには、何かしら内心のものが整理され、やっぱりそうかと確認するところもある。また、発見するところも少なくないし、第一気軽に読めるので、いつのまにか手にし、読みおえている。方法論が好きだという性質によるのかも知れん。これは役に立つ、座右においておきたい、というものは存外にない。そして論文というものはえらくシチメンドウクサイもんだなあ、というしこりだけがのこる。

結局、その著書はその人の方法論であり生き方の折り目づけにすぎない。おれのものはおれの性

にあったものをきずきあげるよりほかない——
というのが、いつもの結論である。

『増補版 仮説実験授業と認識の理論』（季節社2000）より「私的研究法・そのテクニック理論」（1964.12.24）より冒頭の部分を抜粋。

全面教育学研究会 + さ ぶらぶの会 6月定例会のお知らせ

日時：6月5日（土）

13:00～17:00

場所：お茶の水 喫茶アミ

(03-3291-0247)

内容：庄司和晃論（植垣一彦）

その他 授業実験レポート

認識論の日常化などについて

持ち込みレポート歓迎